

老年看護学演習における高齢者擬似体験と 学習効果の関連性

菅原 尚美・小笠原 サキ子

はじめに

本学では保健看護学科の学生に対し、老年看護学概論の演習として、1年次後期に高齢者擬似体験（以下、擬似体験とする）を実施している。その目的は、擬似体験により高齢者の身体的・心理的・社会的特徴を理解するとともに、それらの特性を踏まえた上での援助方法や看護の視点を持たせることにある。

老年看護学における体験学習に関する文献を見ると、「老年期を生きることを理解すること、高齢者への対応についての心構えを動機づけること」¹⁾や、「学生自身が体験したことの無い加齢に伴う老化現象を理解した上で老年期の特徴を理解し、高齢者が自立した生活を送れるよう援助すること、高齢者の残存機能や可能性を見出せる能力を身につけること」²⁾など、いずれも体験により高齢者を理解することで、看護の視点を養うことを目的としている。擬似体験を行った結果、「学生はそれまで持っていた自己の高齢者像を自覚し、その自覚から援助者としての姿勢を問い直し、高齢者に必要な看護の理解を深めている」³⁾として、擬似体験の学習効果を示唆する研究もある。

こうした老年看護学における擬似体験は、千葉大学が「老年期を生きることについて理解すること、そして高齢者への対応についての心構えを動機づけることを目的」⁴⁾として開発したシミュレーションゲームが始まりとされる。擬似体験を老年看護学の演習等で取り入れる理由として、岩鶴¹⁾らは、「昨今の学生の多くは核家族の中で育ち、高齢者と生活を共にする経験が少ない」ため、擬似体験を通して高齢者を理解することが必要であると述べており、また川崎²⁾らは、「核家族化に伴い学生は高齢者との同居体験も少なく、学生自身の現在の生活スタイルから高齢者の身体的・心理的特徴を踏まえた看護援助を考えることや、必要とされる看護介入を理解することも困難な傾向にある」と述べている。擬似体験の多くは、学生や若者の多くが核家族の中で育ち、高齢者とともに生活する経験が昔に比べ少なくなり、普段の生活の中で高齢者を理解することが困難な社会的背景のもと³⁾⁵⁾⁶⁾、高齢者理解の一環として、主に看護学生をはじめとする医療系学生を対象として行われてきた。

しかし今日、65歳以上の高齢者は我が国の全人口の20%以上を占め⁷⁾、高齢者および高齢社会に向けた国民の関心は一層高まっている中で、小中学校や一般企業などの様々な分野でも擬似体験への取り組みが盛んになり、大学へ入学する前に、擬似体験をする学生も多くなっている。2008

年1月に本学で実施した擬似体験では、演習に参加した学生の約4割が、過去に擬似体験をしたことがあると答えている。高齢者人口の増加と、学生や若者が高齢者と接する機会が減ったことを理由に、体験を通して高齢者を理解する目的で擬似体験が行われてきたが、実施に際して学生の過去の擬似体験の有無を問うた研究は見あたらない。過去の擬似体験の有無により、学生間で擬似体験を通しての学びや気づきに違いや特徴が生じている可能性があり、その場合は擬似体験の演習内容を修正し追加する必要があると考えられる。

そこで本研究では、看護大学生の過去の擬似体験の有無と、擬似体験の学習効果との間に何らかの関連があるのかを分析し、考察した結果についてここに報告する。

I 研究方法

1. 調査対象

対象は、演習に参加した4年制看護大学の1年生79名である。学生は、老年看護学概論の中で、老年期の統計的特徴や加齢に伴う生活の変化、高齢者の健康的な生活などについてすでに講義を受けており、老年期にある対象の理解に必要な概念、理論および看護の原則について学んでいる。

2. 調査日

2008年1月8日4限目(14:20~15:40)

3. 方法

擬似体験終了後、演習に参加した学生全員に、日本ウェルエイジング協会の「体験後のチェック表」を参考に作成した“高齢者模擬体験後の整理表”を配布し、記述を求めた。研究に同意する学生は、回収箱に投函するように依頼した。

4. 演習の概要

1年次後期の老年看護学概論で『高齢者模擬体験』として行った。演習の目的は、① 擬似体験により高齢者の身体的特徴を理解する、② 老化による身体的制限に伴う心理的・社会的特徴を理解する、③ 高齢者の特性を踏まえた上での援助の方法や看護の視点を学ぶこととした。

演習の冒頭で、演習担当教員から擬似体験の目的・方法について説明を行った。高齢者体験装具(“おいたろう”) (表1) のセット数に合わせて、担当教員があらかじめ学生79名を10グループに分け、1グループの人数を7~8名で編成した。擬似体験は二人一組となって行わせ、一人は体験者の安全に配慮する役目とした。組み合わせや体験の順番は、学生同士話し合っ決定させた。

擬似体験ではまず高齢者体験装具一式を着用し、① 腕を挙げる、② 腕を曲げる、③ 歩行、

表1 高齢者体験装具セット

1	イヤーマフ (耳あて)
2	特殊メガネ
3	折りたたみ式杖
4	チョッキ
5	肘サポーター
6	膝サポーター
7	手サポーター
8	靴サポーター
9	手首・足首・チョッキ用おもり
10	白布手袋
	その他…ゴム手袋 (感染予防のため)

④ シャガんで立ち上がる, ⑤ 踏み台に乗る, ⑥ 踏み台から降りる, ⑦ 物をまたぐ, ⑧ 電話をかける, ⑨ 電話で相手の声を聞き取る, ⑩ エレベーターに乗り行き先階のボタンを押す, の10項目について擬似体験した。全ての項目を終了した組は, 耳栓・手袋を着用し, 各自思いついた動作を自由に体験した。

高齢者体験装具は, サポーターや特殊メガネなどの装具を着用することにより, 運動能力を80歳前後に低下させる擬似体験装具である。手足にサポーターをはめると, 肘・膝関節などが曲がりにくく, つまづきやすいことなどを体験し, また特殊メガネをかけることにより, 色の識別が困難になりやすくなるとされる。擬似体験が安全に行われるよう, 正しい装着方法や使用上の注意点を説明した。当日は, 体験装具が着用しやすく, 動きやすい服装で臨むこととした。

5. 分析方法

まず過去の擬似体験の有無について, 単純集計を行った。次に擬似体験の有無と, 擬似体験を通しての「高齢者理解の度合」, 「感覚的な能力」の実感, 「身体の具体的な動き」の実感, 「日常生活行動」に対する不安・不自由さ・不便さ, との関連について, それぞれ χ^2 検定を行った。また, “擬似体験によって「ホントにそうだ」と納得したこと”に関して自由記述された内容を, 類似性に基づいて分類した。

6. 倫理的配慮

学生に研究の主旨, 方法, 匿名性, 守秘性の保障, 記述内容は授業評価の対象としない旨を書面で説明した。“高齢者模擬体験後の整理表”は無記名とし, 回収箱への投函をもって研究への同意とした。記述内容を抽出する際は, 学生が特定される可能性のある表現は削除した。

II 結 果

研究に同意が得られた学生は、79名中73名(92.4%)であった。 χ^2 検定の結果を、以下に示す。

1. 過去の擬似体験の有無

有効回収73名のうち、過去に擬似体験をしたことのある学生(以下、体験群とする)は31名(42.5%)、擬似体験をしたことのない学生(以下、未体験群とする)は41名(56.2%)であった。

2. 擬似体験の有無と「高齢者理解の度合」との関連

擬似体験を通して、「老人の身体的な機能低下を実感できたか」など4項目について、「高齢者理解の度合」を自己評価し、非常にできた、ややできた、ふつう、余りできなかった、全くできなかった、から1つ選択させた。非常にできた、ややできたと答えた学生について高齢者理解を実感できたとして高群、ふつう、余りできなかった、全くできなかったと答えた学生を低群として、擬似体験の有無との関連を見た。擬似体験の有無と「高齢者理解の度合」との間に、有意な関連は認めなかった(表2参照)。

3. 「感覚的な能力」

「感覚的な能力」5つについて、「あなたの普通の状態を100%」として、擬似体験ではどのくらいの能力と感じたか、10%、20%、…90%、100%の中から一つ選択させた。回答は普通の状態の50%以下(半分以下)の能力と感じた学生と60%以上の能力と感じた学生とに分類し、過去の擬似体験の有無との関連を見た。数値が低いほど、普段と比べて負担感や困難度が高いことを

表2 擬似体験の有無と「高齢者理解の度合」との関連 人数(%)

		高群		低群		人数 (%)
		非常にできた ややできた	ふつう 余りできなかった 全くできなかった			
老人の身体的な機能低下を実感できましたか	体験群	29(96.7)	1(3.3)	$\chi^2(1)=1.092$ n.s.		
	未体験群	37(90.2)	4(9.8)			
身体的な制限に伴う老人の心理を感じ取ることができましたか	体験群	28(93.3)	2(6.7)	$\chi^2(1)=1.100$ n.s.		
	未体験群	35(85.4)	6(14.6)			
自己の老年観を考えるきっかけになりましたか	体験群	24(82.8)	5(17.2)	$\chi^2(1)=0.087$ n.s.		
	未体験群	35(85.4)	6(14.6)			
援助される側からの視点で援助の方法や接し方などを考えることができましたか	体験群	25(86.2)	4(13.8)	$\chi^2(1)=0.138$ n.s.		
	未体験群	34(82.9)	7(17.1)			

表3 「感覚的な能力」

人数 (%)

		50% 以下	60% 以上	
文字などを読む能力	体験群	13 (43.3)	17 (56.7)	$\chi^2(1) = 0.005$
	未体験群	17 (42.5)	23 (57.5)	n.s.
色を識別する能力	体験群	16 (53.3)	14 (46.7)	$\chi^2(1) = 0.972$
	未体験群	26 (65.0)	14 (35.0)	n.s.
音の聞こえ方	体験群	22 (71.0)	9 (29.0)	$\chi^2(1) = 0.000$
	未体験群	29 (70.7)	12 (29.3)	n.s.
指先の細かい動き	体験群	27 (87.1)	4 (12.9)	$\chi^2(1) = 4.249$
	未体験群	27 (65.9)	14 (34.1)	n.s.
手で感じる温度感覚	体験群	28 (90.3)	3 (9.7)	$\chi^2(1) = 1.319$
	未体験群	33 (80.5)	8 (19.5)	n.s.

表4 「身体の具体的な動き」

人数 (%)

		50% 以下	60% 以上	
腕を挙げること	体験群	21 (67.7)	10 (31)	$\chi^2(1) = 4.891^*$
	未体験群	17 (41.5)	24 (58.5)	
腕を曲げること	体験群	23 (74.2)	8 (25.8)	$\chi^2(1) = 3.176$
	未体験群	22 (53.7)	19 (46.3)	n.s.
歩行の能力	体験群	19 (61.3)	12 (38.7)	$\chi^2(1) = 0.196$
	未体験群	23 (56.1)	18 (43.9)	n.s.
しゃがんで立ち上がる能力	体験群	26 (83.9)	5 (16.1)	$\chi^2(1) = 2.950$
	未体験群	27 (65.9)	14 (34.1)	n.s.

* $p < .05$

示している。

擬似体験の有無と「感覚的な能力」との間に、有意な関連は認めなかったが、普通の状態と比べ半分以下の能力であると感じた学生は、“指先の細かい動き”，と“手で感じる温度感覚”では、体験群の比率が高く、“色を識別する能力”については、未体験群の比率が高い結果となった（表3参照）。

4. 「身体の具体的な動き」

“腕を挙げること”，“腕を曲げること”，“歩行の能力”，“しゃがんで立ち上がる能力”の「身体の具体的な動き」4つについて、「あなたの普通の状態を100%」として、擬似体験ではどのくらいの能力と感じたか、10%，20%，…90%，100%の中から一つ選択させた。回答は普通の状態の50%以下（半分以下）の能力と感じた学生と60%以上の能力と感じた学生とに分類し、過去

表5 「日常の生活行動」

人数 (%)

			感じた	感じなかった	
電話をかける	不安	体験群	21(67.7)	10(32.3)	$\chi^2(1) = 1.187$
		未体験群	22(55.0)	18(45.0)	n.s.
	不自由さ	体験群	27(87.1)	4(12.9)	$\chi^2(1) = 1.410$
		未体験群	38(95.0)	2(5.0)	n.s.
	不便さ	体験群	27(87.1)	4(12.9)	$\chi^2(1) = 1.410$
		未体験群	38(95.0)	2(5.0)	n.s.
電話で相手の声を聞き取る	不安	体験群	25(80.6)	6(19.4)	$\chi^2(1) = 0.040$
		未体験群	33(82.5)	7(17.5)	n.s.
	不自由さ	体験群	28(90.3)	3(9.7)	$\chi^2(1) = 0.107$
		未体験群	37(92.5)	3(7.5)	n.s.
	不便さ	体験群	29(93.5)	2(6.5)	$\chi^2(1) = 0.284$
		未体験群	36(90.0)	4(10.0)	n.s.
踏み台に乗る	不安	体験群	25(80.6)	6(19.4)	$\chi^2(1) = 0.000$
		未体験群	33(80.5)	8(19.5)	n.s.
	不自由さ	体験群	29(93.5)	2(6.5)	$\chi^2(1) = 0.252$
		未体験群	36(90.2)	4(9.8)	n.s.
	不便さ	体験群	27(87.1)	4(12.9)	$\chi^2(1) = 0.177$
		未体験群	36(90.2)	4(9.8)	n.s.
踏み台から降りる	不安	体験群	27(87.1)	4(12.9)	$\chi^2(1) = 0.177$
		未体験群	36(90.2)	4(9.8)	n.s.
	不自由さ	体験群	27(87.1)	4(12.9)	$\chi^2(1) = 0.628$
		未体験群	38(92.7)	3(7.3)	n.s.
	不便さ	体験群	27(87.1)	4(12.9)	$\chi^2(1) = 0.008$
		未体験群	36(87.5)	5(12.2)	n.s.
物をまたぐ	不安	体験群	21(67.7)	10(32.3)	$\chi^2(1) = 0.638$
		未体験群	24(58.5)	16(41.5)	n.s.
	不自由さ	体験群	20(64.5)	11(35.5)	$\chi^2(1) = 0.922$
		未体験群	30(75.0)	10(25.0)	n.s.
	不便さ	体験群	22(71.0)	9(29.0)	$\chi^2(1) = 0.212$
		未体験群	27(65.9)	14(34.1)	n.s.
エレベーターに乗る	不安	体験群	10(32.3)	21(67.7)	$\chi^2(1) = 0.028$
		未体験群	14(34.1)	27(65.9)	n.s.
	不自由さ	体験群	18(60.0)	12(40.0)	$\chi^2(1) = 0.108$
		未体験群	23(56.1)	18(43.9)	n.s.
	不便さ	体験群	17(54.8)	14(45.2)	$\chi^2(1) = 0.259$
		未体験群	20(48.3)	21(51.2)	n.s.

の擬似体験の有無との関連を見た。

擬似体験の有無と「腕を挙げること」との間に、有意な関連を認めた。また4項目において、50%以下の能力と感じた学生は、体験群の方の比率が高い、という結果が得られた(表4参照)。

5. 「日常の生活行動」

「日常の生活行動」6つについて、擬似体験によって不安、不自由さ、不便さを感じたかどうか聞いた。「電話をかける」不安と、「物をまたぐ」不安、不自由さ、不便さ以外の項目では、両群とも80%以上の学生が不安、不自由さ、不便さを感じていた。また、「電話をかける」不安について

表6 高齢者模擬体験によって「ホントにそうだ」と納得したことはどういうことでしたか。

183件

カテゴリ	サブカテゴリ	両群共通	体験群	件数	未体験群	件数
【身体機能の低下を実感】	《運動機能についての実感》	<ul style="list-style-type: none"> 《思った通り動けなくて大変》 《からだ動かさず全て不自由》 《バランスが取れず、歩行が困難》 《腕や足の屈伸が困難》 《段差が高いと怖い、危険だ》 《手すりがないと不安》 《動きが制限されている》 	<ul style="list-style-type: none"> 《歩きにくくて憂鬱になった》 《高齢者は体力をたくさん使って生活しているんだと思った》など 	36	<ul style="list-style-type: none"> 《高齢者になると全ての機能が衰えてしまうのだと感じた》 《疲れて動作が億劫になる》 《からだをどう動かしているのか分からず不安》 《身体機能低下が生活にも影響している》 	42
	《感覚機能についての実感》	<ul style="list-style-type: none"> 《視野が狭いため動作がゆっくりになった、障害物が怖かった、視野が狭いと常に不安》 《手の感覚が鈍い》 《耳が遠いと不安、不自由だ》 	<ul style="list-style-type: none"> 《声が聞こえづらくてびっくりした》など 	37	<ul style="list-style-type: none"> 《聞き取れないなんて情けないと思った》 《昔できていたことができないというのは苦しいだろう》など 	34
				計73		計76
【高齢者にとって危険なこと】	《転倒のリスク》	<ul style="list-style-type: none"> 《視野が狭いと足元が見えず危険だ》 《段差で転倒しやすい》 	<ul style="list-style-type: none"> 《高齢者はバランスを崩しやすい》など 	6		2
	《けがなどの危険》		<ul style="list-style-type: none"> 《手の温度感覚が鈍いので、やけどの可能性もある》 	1	<ul style="list-style-type: none"> 《人ごみを一人で歩くのは危険だ》 《聴力の低下・視野の狭さにより交通事故が起りやすい》など 	4
				計7		計6
【高齢者の立場になって気づいたこと・理解できたこと】	《高齢者に必要な援助や環境》	<ul style="list-style-type: none"> 《高齢者が安心して暮らすには、周囲の援助が必要》 《バリアフリーをもっと増やすべきだ》 	<ul style="list-style-type: none"> 《高齢者に合った街づくりをすると良いと思う》など 	3	<ul style="list-style-type: none"> 《バリアフリーの大切さに気付いた》など 	3
	《身近な高齢者の立場になって気づいたこと》		<ul style="list-style-type: none"> 《文字を読んでほしいと言ったり、何度も聞き返したりするのは仕方ないことだ》 《何度も聞き返すおばあちゃんの気持ちがよく分かった》など 	5	<ul style="list-style-type: none"> 《祖母がいつも音量を高くしてTVを見ていた理由が分かった》 《祖母が感じていた不安や不自由さを実感した》 《自動販売機でもたついているお年寄りに「なんでこんなに遅いんだろう」と思った自分が恥ずかしい》 《高齢者の動作がゆっくりなのは、身体機能の低下だけでなく不安も影響していると分かった》 	13
				計8		計16

は、体験群の方が不安を感じた学生の比率が高いことが明らかである。その他の項目では、擬似体験の有無による差は認めず、擬似体験の有無と各項目との間に有意な関連は認めなかった(表5参照)。

6. 擬似体験によって「ホントにそうだ」と納得したことはどういうことでしたか

自由記述された内容について熟読し、意味内容と擬似体験の有無によって分類し、まとめた。

全183件の記述が得られ、【身体機能の低下を実感】、【高齢者にとって危険なこと】、【高齢者の立場になって気づいたこと・理解できたこと】、の3つのカテゴリに分類し、体験群の記述、未体験群の記述、両群に共通する記述に分けて比較した(表6参照)。**【身体機能の低下を実感】**には、〈思った通りに動けなくて大変〉など《運動機能についての実感》に関することと、〈手の感覚が鈍い〉などの《感覚機能についての実感》に関するサブカテゴリ2つを含めた。**【高齢者にとって危険なこと】**には、〈段差で転倒しやすい〉など《転倒のリスク》に関することと、〈手の温度感覚が鈍いので、やけどの可能性があるので〉など《けがなどの危険》に関するサブカテゴリ2つを含めた。**【高齢者の立場になって気づいたこと・理解できたこと】**には、〈高齢者が安心して暮らすには、周囲の援助が必要〉などの《高齢者に必要な援助や環境》に関することと、〈何度も聞き返すおばあちゃんの気持ちがよく分かった〉などの《身近な高齢者の立場になって気づいたこと》に関するサブカテゴリ2つを含めた。

III 考 察

1. 体験群・未体験群とも高齢者を理解できた、との実感を得ている

「老人の身体的な機能低下を実感できたか」、「身体的な制限に伴う老人の心理を感じ取ることができたか」、「自己の老年観を考えるきっかけになったか」、「援助される側からの視点で援助の方法や接し方などを考えることができたか」、の4項目について「高齢者理解の度合」を聞いたところ、体験群、未体験群ともに80%以上の学生が実感できたと答えている。各項目は、① 擬似体験により高齢者の身体的特徴を理解する、② 老化による身体的制限に伴う心理的・社会的特徴を理解する、③ 高齢者の特性を踏まえた上での援助の方法や看護の視点を学ぶ、とした演習の目的が含まれており、擬似体験を通して、過去の擬似体験の有無に関わらず、多くの学生は演習の目的を理解していると考えられる。「擬似体験によって「ホントにそうだ」と納得したこと」に関する記述の中で、【身体機能の低下を実感】した記述が最も多く、両群に共通して〈からだ動かさず全て不自由〉、〈段差が高いと怖い、危険だ〉と感じており、「身体的な特徴から、行動の不自由さや苦痛、また危険性についても捉えていた」とする岩鶴¹⁾らの結果と一致する。また、未体験群の中には、〈昔できていたことができないというのは苦しいだろう〉や、〈聞き取れないなんて情けないと思った〉と答えた学生がおり、「身体的機能低下から気持ちへの影響を感じていた」とする

岩鶴¹⁾らの結果と一致する。また両群に共通して、〈バリアフリーをもっと増やすべき〉とする記述が見られた。橋本²⁾らは、学生は擬似体験を通して「建物の構造や設備の不便さにも気づいている」と述べ、「エレベーターなどの設備や、わずかの段差が高齢者にとっては不便かつ危険であり、高齢者の活動のバリアになることにも気づいている」と考察している。学生は擬似体験を通して、高齢者の身体的な機能低下への理解を深めるだけでなく、高齢者の心理的側面や社会的側面に視点を向けていると考えられる。擬似体験は高齢者理解を目的としており、今回の結果で、80%以上の学生から高齢者を理解することができた、との実感を得たことは、擬似体験の学習効果と言える。

2. 擬似体験の有無により、負担感や困難度に差が生じる可能性がある

「感覚的な能力」5 つについて、普通の状態と比べ50%以下の能力と感じた学生は、“指先の細かい動き”，と“手で感じる温度感覚”では、体験群の比率が高く、“色を識別する能力”に関しては、未体験群の比率が高い、という傾向が見られた。“色を識別する能力”，“指先の細かい動き”，“手で感じる温度感覚”，では擬似体験で感じた負担感や困難度において、過去の擬似体験の有無で差が見られた。擬似体験の有無と「感覚的な能力」との間に有意な関連は認めなかった。

本研究では、過去の擬似体験での体験内容や時期などの詳細は調査していない。そのため、同じ体験群の学生でも、過去の擬似体験の内容に違いがあり、今回の演習で初めて体験した項目もあると考えられる。よって、「感覚的な能力」3項目に関する結果が、擬似体験の有無による違いであるとは一概には言えないが、体験する項目によって、擬似体験の有無により負担感や困難度に何らかの差が生じる可能性が考えられる。

「身体の具体的な動き」4 つについて、普通の状態と比べ50%以下の能力と感じた学生は、全項目において体験群の比率が高かった。また、擬似体験の有無と“腕を挙げること”との間に有意な関連を認めたが、今回の研究ではその原因は分からなかった。「感覚的な能力」と同様に、擬似体験の有無により負担感や困難度には何らかの差が生じる可能性が示唆された。

3. 擬似体験の有無に関わらず、不安よりも不自由さや不便さを感じている

「日常生活行動」6 つに関して、擬似体験によって不安、不自由さ、不便さを感じたかどうか聞いたところ、“電話をかける”について体験群の方が不安を感じた学生の比率が高かったが、その他の項目では明らかな差は認めなかった。

「日常生活行動」について、不安よりも不自由さや不便さを感じた学生が多い傾向が見られた。有馬³⁾は、「高齢者は、生活の中で、不安感を強くもっているイメージであるが、擬似老人では、むしろ、不自由感なのだということが明らかになった。」と述べ、青年期の年代での擬似体験では、目先の行動への不自由感が挙げられるが、高齢者は日常生活の中でさまざまな感情を抱えているとして、「不自由感→できないもどかしさ→能力の喪失感→今後ますますできなくなるのでは、と

いう不安へとつながっていくのであろう。」と述べている。このことから、不安、不自由さ、不便さの3つの感情については、対象が青年期にあることを踏まえた分析の必要性が考えられる。

4. 擬似体験によって「ホントにそうだ」と納得したこと

全183件の記述の多くは【身体機能の低下を実感】に関する記述であり、過去の擬似体験に関する研究結果でも、身体的側面に関する記述が最も多かった²⁾¹⁰⁾。《運動機能についての実感》では、“不安だった”、“大変だった”として多くが身体の不自由さや動作の困難さをあげ、川崎²⁾らが述べるように、「身体的苦痛、困難さに対する苛立ちといった否定的感情が先立っている」と思われる。未体験群では「からだをどう動かしていいのか分からず不安」を感じており、高齢者体験装具を身につけたものの、初めての経験で、どのように動いていいのか戸惑い不安に感じたものと考えられる。また、両群で「動きが制限されていると感じた」との記述が見られた。《感覚機能についての実感》では、未体験群で「聞き取れないなんて情けないと思った」や、「昔できていたことができないというのは苦しいだろう」と感じており、感覚機能の衰えを体験して落胆した自らの気持ちや、体験を通して高齢者の心理にまで考えを深めている。

【高齢者にとって危険なこと】のうち《けがなどの危険》では、体験群では「手の温度感覚が鈍いので、やけどの可能性はある」として感覚機能の低下に伴って予測される危険について述べている。また未体験群では、「人ごみの中を一人で歩くのは危険だ」や、「聴力の低下・視野の狭さにより交通事故が起こりやすい」として、身体的機能の低下が“人ごみを歩く”といった日常生活の動作を困難で危険なものにしていると感じている。擬似体験の演習中の体験と、日常生活の中の危険を結びつけて捉える事ができている。これは、擬似体験の有無というよりむしろ、学生個人のこれまでに得た経験的な知識が関連しているものと考えられる。

【高齢者の立場になって気づいたこと・理解できたこと】に関する記述は、体験群は8件で、未体験群は16件であり、そのほとんどは《身近な高齢者の立場になって気づいたこと》に関する記述で、体験群が5件、未体験群は13件であった。未体験群では、「自動販売機でもたついているお年寄りに「なんでこんなに遅いんだろう」と思った自分が恥ずかしい」と、高齢者に対するこれまでの自分の言動を振り返る言葉も見られた。このカテゴリの記述内容を見ると、高齢者との同居の有無が関係していると思われ、擬似体験の有無とともに同居の有無をふまえた分析の必要性が考えられる。

おわりに

擬似体験を通して、体験群、未体験群ともに80%以上の学生が、高齢者を理解できたと実感していた。対象は老年期の統計的特徴や加齢に伴う生活の変化についてすでに講義を受けており、今回の演習では実際に高齢者の身体的機能低下を体験することにより、体験と既習の知識とを融合

し「ホントにそうだ」と納得することができたのだと考えられる。

本研究では、1学年の実に40%以上が、過去に高齢者擬似体験を体験しており、その体験の有無が「高齢者理解の度合い」と、何らかの関連があると考えられた。この結果は、今後の大学教育における高齢者擬似体験のあり方とその教育方法をあらためて検討する必要性を示唆するものである。しかし、今回の調査では、過去の高齢者擬似体験の体験について、体験した回数や体験の内容、時期などは質問しておらず、追跡調査の際には十分考慮する必要があると思われる。

文 献

- 1) 岩鶴早苗, 天津榮子, 水田真由美: 老人看護学における学内演習の効果の検討—「Aging」「排泄体験」を通して—, 和歌山県立医科大学看護短期大学部紀要, 3, 39-47, 1999
- 2) 川崎彰子, 千葉恭子: 看護基礎教育における高齢者擬似体験の学習効果—小グループでの討議記録を質的に分析して—, 日本赤十字武蔵野短期大学紀要, 17, 21-27, 2004
- 3) 原沢優子, 松岡広子, 星野純子, 宮下美香, 濱畑章子: 老年看護学における高齢者理解に向けた体験学習の効果と課題, 愛知県立看護大学紀要, 10, 41-48, 2004
- 4) 佐藤弘美, 正木治恵, 永江美千代, 黒田久美子, 野口美和子: 老年期を生きることを理解するためのシミュレーションゲームの効果について, 千葉大学看護学部紀要, 5, 155-159, 1993
- 5) 服部紀子, 中村真理子: 老人イメージの変化—高齢者擬似体験前後の比較から—, 東海大学医療技術短期大学総合看護研究施設年報, 11, 12-25, 2001
- 6) 福岡裕美子: 学生が体験した高齢者擬似体験の学習効果, 秋田桂城短期大学紀要, 12, 55-62, 2002
- 7) 総務省統計局 (<http://www.stat.go.jp/data/topics/topi32/.htm>): 高齢者の人口
- 8) 橋本文子, 松下恭子, 多田敏子: 看護学生を対象とした高齢者擬似体験学習の意義—高齢者および介護者体験からの学び—, 老年看護学, 7, No. 1, 95-102, 2002
- 9) 有馬千代子: 第4章高齢者擬似体験で看護学生が感じた生活能力と高齢者理解—高齢者擬似体験学習を取り入れた老年看護学教育, 日本赤十字武蔵野短期大学 研究成果報告書, 19-36, 2000
- 10) 兎澤恵子, 古市清美, 高木タカ子: 看護大学生の連続学習による高齢者イメージ変化, 群馬パース学園短期大学紀要, 3, 381-387, 2005